

寄稿

## プロダクティブ・エイジング

### 若松茂生

*Shigeo Wakamatsu*

初代ILC日本事務局長

バトラー先生と初めてお会いしたのは1990年9月5日、設立したばかりのILC米国センターのオフィスであった。その時先生がピューリッツァー賞をとられた“Why Survive? Being Old in America”を日付とサイン入りでいただいたのでその日のことをはっきり思い出すことができる。先生は「プロダクティブ・エイジング」という言葉に何度も言及され、人口高齢化問題とか老人問題を日米で共同研究するのではなく、プロダクティブにクリエイティブに歳をとるにはどうしたらよいかを研究するためのリーダーシップをとるセンターにするのだという抱負を熱っぽく語られた。アメリカでは老年学という学問分野があり、先生はマウントサイナイ医科大学老年医学部長であった。当時の日本にはこんな学部があったであろうか。この事実だけでも深い感銘を受けた。

「プロダクティブ・エイジング」は高齢化時代を迎える我々にとって素晴らしいメッセージであった。このメッセージだけで国際長寿社会リーダーシップセンター（当時のILC正式名称）の目的が見事に表現されている。そこで我々は、日本センターの名刺に明るい緑でPRODUCTIVE AGINGと

いうロゴを刷り込み、このメッセージを広めるために機関誌を発行、タイトルを「プロダクティブ・エイジング」とした。

その後何度もニューヨークに出張してバトラー先生と行動をともにしたが、ワシントンでは日本センター初代理事長伊部英男氏とロックフェラー上院議員、グレン上院議員など有名な政治家との面談を先生がアレンジしてくださった。我々は先生のネットワークと政治力に驚かされた。グレン上院議員は1962年にアメリカ初の地球周回軌道を飛行した宇宙飛行士で、我々が面談した8年後の1998年10月に77歳でスペースシャトルに乗り込み宇宙に9日間滞在、高齢者の可能性を示した。まさにプロダクティブ・エイジングを実践されたわけだが、先生の慧眼に今さらながら驚かされる。先生は移動の車の中でも電話を方々にかけて忙しくお仕事をされていたのが印象に残っている。先生と最後にお会いしたのは1998年12月7日であったが、相変わらずお元気な先生に圧倒された。その後お会いできる機会がなかったのが残念である。

（ニュージャージー州 グレン・ロック在住）



1991年、米国視察時の博士(左端)と筆者(右から2人目)